［書評］東アジア哲学の条件

『東アジアにおける哲学の生成と発展』（廖欽彬・伊東貴之・河合一樹・山村奨編）に寄せて

朝　倉　友　海

１　集合知から浮かび上がる特徴

「東アジア哲学の形成をめざして」というまえがきから始まる本書は、四四編の研究論文を収録しており、まず個別論文の質の高さが目をひく。それぞれの研究領域における独自の貢献が多く見られ、例えば西田研究に関するものだけ集めても一冊の研究書となると思われる[1]。従来あまり扱われてこなかった尾高朝雄や新田義弘も主題的に取り扱われており、個々の論文から得られるものは非常に大きい[2]。

だが以下では、個々の論文を検討するのではなく、いわば集合知のもとに本書全体を通して現れてくるものは何かと問う。大きな分量を占める「第 I 部　日本哲学と西洋哲学」・「第 III 部　日本哲学の多用な展開」を通覧すると第一に目に付くのは、取り扱われる時代に偏りが見られることだ。二〇世紀前半の哲学者が主に扱われており、近代以前および第二次大戦後はほぼ考察対象から外れている[3]。無論この偏りは本書の特徴として肯定的に捉えることもできよう。ただ、例えば藤田正勝『日本哲学史』が扱う範囲と対比すれば、『東アジアにおける哲学の生成と発展』という表題との関係でややバランスを欠く印象がある。

---

[1] 以下、各論考は筆者名と論文番号の併記により示す。西田研究に関わる論文八本を挙げれば、時間論に関する嶺 02 およびフォンガロ 07、新田現象学との関係での谷 12、ディルタイ受容との関係での牧野 23、志野 24 が論じる物概念、林 29 の儒家的視点、柳宗悦との比較を行う太田 32、老荘思想と比較する王 39 となる。

[2] 以下では多くの収録論文に触れたもの、八五〇頁を超える本書に収められる論文すべてに触れることはできない。言及の有無はあくまでも評者の立論上の必要によるもので個別論文の評価に関わるものではない。

[3] 2000 年代までフッサール受容を追う浜渦 28 や、新田を扱う谷 12 は例外的であり、いわゆる「東京学派」はほとんど視界から外れている。

特徴として第二に挙げられるのは「現象学」の比重の大きさである。フッサール受容をめぐるものが複数あるとともに[4]、ハイデガー受容に特化した論考が三本収められている（藤田 01・廖 09・景山 14）。本書でも和辻のアリストテレスやマルクスとの交雑化に触れている安部 03 などがあるとはいえ、古典的な哲学者の「受容」はあまり取り上げられていないという印象を受ける[5]。現象学の比重の大きさは日本哲学だけに限られず、本書における中国哲学の扱いにも見られる特徴となっている。

たしかに近代日本哲学研究においてハイデガー受容は主題として「定番」であることは、景山 14 が指摘する通りである。これは二〇世紀哲学におけるその重要性に比例してもいる。ただ、この点で言えば、ハイデガーや大陸哲学的な観点と並べて、英語圏の哲学への注意がもう少し見られてもよいだろうし、実際にその方面での研究を進めている寄稿者が何人か含まれているにも関わらず、少なくとも本書収録の論考に反映されているとは思われない[6]。

この偏りは内容上の性格と結びついている。本書でいわゆる「大陸哲学」が多く参照されているのもまた、文化論に傾く思想家論が多いためと考えられよう。本書でも時間など形而上学的な問題は扱われてはいるが、個々の哲学的問題がそれとして取り扱われることは少なく、分析的な論述はあまり見られない。「第II部 中国・台湾哲学と西洋哲学」ではより個別の哲学的問題に焦点があてられているが、中国語圏の哲学には伝統的に（おそらく日本よりもよほど）英語圏の影響が強いこととの折り合いがつかない。一方で、数理・科学・論理・言語などに関する内容は、本書においてはほぼ例外的なものとなっている。

疑問となるのは、本書における日本哲学の扱いに即して挙げた以上の特徴が、「東アジア哲学」の性格を示すものなのか、それとも本書の特徴に過ぎないのか、

---

[4] 浜渦 11・浜渦 28 がこの点を扱っている。ディルタイ受容に関する牧野 23 も貴重な論考となっている。

[5] 牧野英二編『東アジアのカント哲学』（2015 年）はもちろん、日本哲学形成の上で存在感が大きいスピノザやライプニッツなど近世哲学をめぐっても、受容史の研究が大きく進められていることを、近年の研究動向として指摘することができる。

[6] 分析哲学に関する実際の言及として評者が気づいたものを挙げれば、佐藤 33 が大森荘蔵に触れ、林 29 がアンスコムに言及するのにほぼ限られる。

という点だ。しかし本書の内容は以上に限られたものではなく、後半部の「第 IV 部　中国と日本の思想的邂逅」・「第 V 部　朝鮮・ベトナム哲学と知の越境」などでは、幾人かの論者が「東アジア哲学」という枠組みが有効にはたらくための条件にかかわる考察を行っていることも見逃せない。評者が考えるに、こうした論点は上記の疑問との関係で検討に値すると思われる。

そこでまず、本書の特徴から生じる疑問を次の二つの方向で展開する。日本哲学は本当に文化論へと偏っているのかという方向と、そもそも東アジア哲学はそれとして、哲学的な貢献という観点から真剣に扱われるべき価値があるのかどうかという方向である。以上の二つの方向での検討を通して、最後に「東アジア哲学の条件」として本書で示されていると評者には思われる多角的理解と媒介性について述べる。

2　美的関心を中心とした日本哲学のイメージ

本書は西田・田辺論も多いが、九鬼・和辻論も同じくらい多い[7]。特に和辻の存在感は、過剰にも思えるほどだ。周知のように和辻自身の哲学には文化論的な側面が強く見られることに鑑みれば、本書全体から浮かび上がってくる、これまでとはやや異なる日本哲学像は次のようなものとなろう――すぐれて日本的な哲学者像を示しているのは、西田でも田辺でもなく和辻なのだ、と[8]。

和辻哲学の特徴として安部 03 が指摘している「際立った文化交雑的性格」は、たしかに日本的ないし東アジア的な「哲学」の性格をよく示している。これは肯定的に述べることが出来るものであるとともに、批判的な観点へも転化しうるだろう。つまり、今日の東アジア哲学研究は果たして十分に文化交雑的なのかと問うこともできる（この点に関しては後に検討する）。

---

[7] 九鬼については三本（嶺 02、上原 04、亀井 06）、和辻にいたっては、西田論に次いで多くなっている（安部 03、合田 24、飯嶋 31、山村 34、さらに河合 10 も関連する）。

[8] もっとも、本書が和辻理解において提示する様々な観点は、必ずしも文化論的なものに限られない。浜渦 11 が和辻をフッサール現象学の影響のもとに再解釈している点などは、これまで本人の言説のままにハイデガーの影響のもとに見てきた見方の再考を迫るものである。

文化論的な偏りと関係して言えば、本書には美や芸術に関する考察が多く収められていることが目を引く。日本哲学の基調としてある種の美意識があることが、本書を通じて浮かび上がってくるかのようだ。例えば、本書における唯一の西谷啓治論（秋富 25）は杉村 05 の田辺論と併せて「詩」をめぐるものとなっていることは、象徴的であろう。また、陶芸を念頭において美を考察する上原 04 が、九鬼と西田に通底するものを見出そうとするとき、そして柳宗悦と西田とに共通するものを炙り出そうとする太田 32 の論考を併せて読むとき、日本哲学における美や芸術の重要性がこれまでとは違った仕方で解明されているさまを読み取ることができる。

美学そのものに関しては、大西克礼の美学を整理することに終始すると自ら述べる河合 10 が優れた記述を与えている。よく知られた内容ではあるが、そこで崇高の派生体としての「幽玄」、美の派生体としての「あわれ」、そしてフモールのそれとしての「さび」が論じられているのに目を向けるならば、日本的感性による美学的カテゴリーの拡充が明瞭に示されていることを疑うことはできない。

ところが、本書の第一論文は、以上のような印象とは真っ向から対立するかのように始まっている。藤田 01 の冒頭は、まさに田辺が「主たる研究対象としたのは、科学哲学や数理哲学であった」ことの指摘から始まる。田辺のハイデガー受容をテーマとした個別研究としてすぐれた同論文では、日本哲学において「科学哲学や数理哲学」が当初から重要なものであったことが明確に言われており、たとえその晩年の詩論が重要であるにせよ、日本哲学のイメージを文化論的・美学的なものに収斂させてはならないことを述べているかのようでもある。

藤田 01 をもう少し見てみよう。田辺がドイツに留学したとき彼の地での新たな潮流に触れ、それへの批判的考察から自らの思索を進展させたことをあとづける同論文において、もっとも重要な指摘となっているのは、ミンコフスキー空間としての「世界」概念によってハイデガーの図式論を乗り越えようとすることが、種の論理の形成へといたったという論点である。田辺哲学を大きく動かしていたものとしての数理科学への関心を等閑視することは、やはりできないのである。

数理科学思想はマイナーな研究領域だと、「哲学」という語の内実をおさえたう

えで言うことは、到底できない。数理科学思想をまったく切り離して哲学について語ることは、西洋的伝統から言えば異常なことである。このことの確認のためにフッサール哲学の性格を振り返ることすら必要ないかもしれない。なぜなら、すでに明治期の日本ではこの点が真剣に受け止められていたからだ。

本書全体を通じて論理プロパーに目を向けているのは、桑木厳翼による「荀子の論理説」に焦点をあてる中島 35 のみである[9]。そこで言及されているように、明治期に論理学への強い関心があったことや、桑木の「シナ古代論理思想発達の概説」（1900 年）が古代中国思想での論理を広く扱う画期的な研究であったことは、強調に値する事柄であろう[10]。

今日にいたるまで、東アジア哲学研究において論理研究は決してマイナーな分野とは言えないことは、西田や田辺のキーワードが「論理」であること、大森荘蔵がクワインの紹介者の一人であること、末木剛博の『東洋の合理思想』（1970 年）が東京学派の重要な成果の一つであることなど、枚挙にいとまがないだけでなく、さらに中国語圏へと目を向けたとしても、牟宗三の初期の論理思想を挙げるまでもなくたくさんの例が目に付く。今日の東アジア哲学でも、論理的考察はアクチュアルなテーマであり続けている。

廖氏の「まえがき」でも分析哲学との関係が言及されてはいるものの（v 頁）、内容的に反映されるには至っていない。本書では論理的観点が薄く、また圧倒的に大陸哲学が主な比較項となっている。もちろん個別研究においてそれが必然性をもつ場合もある。しかし、「東アジア哲学」そのものの特徴とは言えないと評者は考える。

３　哲学的貢献は那辺にあるか

つぎに、どんな哲学的貢献があるのかという点に注意を向けたい。先述のよう

[9] もう一つの例外として、景山 14 が弁証法に焦点をあてていることにも触れねばならない。
[10] なお、このことに関して興味深いのは、胡適（1919 年）や馮（1934 年）の中国思想史には桑木の研究に対する言及がないという確認である。ここには「東アジア哲学」の大きな問題があり、後に論じなければならない。

に大西美学による美学的カテゴリーの拡張は、美学への明確な貢献であるし、幾人かの中国からの寄稿者は、形而上学的方面での哲学的貢献について述べようともしている。しかし、東アジア哲学がどのように哲学に貢献するのかは、本書を通じてあまり明確には読み取れないのではないだろうか。

本書が全体として哲学的テーマに焦点を結ばないことは、藤田正勝の『日本哲学史』がテーマ別の整理を含むことと比べても、気になる点であろう[11]。率直に言えば、もし哲学的なテーマが浮き上がってこないのならば、そもそも東アジア哲学が哲学的にどのような貢献をなすものなのかが不明ということになるはずだと思われる。

例えば、本書には時間論的な考察がいくつか見られる[12]。ただし、時間をキーワードとした思弁が、時間に関して何を問い・何を明らかにしたかが、開かれたかたちで明確となっているとは言い難い。注意深く見ることで本書から横断的に浮かび上がってくるテーマを見つけ出すこともできよう。例えば「もの」というカテゴリーはそうであろう。和辻と大西に共通に「もの」への着目を河合 10 が論じ、源了圓に基づき西田の「もの」をめぐる思想に志野 27 が着目するのは、単に本居宣長に関係するだけでなく、哲学的テーマとして重なっている[13]。「もの」というカテゴリーは形而上的にみて中核的に論じられてしかるべきであろう——とはいえ、これら二論文が納められているのはそれぞれ I 部と III 部とであり、一つにまとまったかたちで扱われておらず、本書を通じて思想的に焦点を結ぶと言えるかは疑問である。思想史的な考察の上で、さらに概念的に取り出して展開することがなければ、哲学の内容としていささか物足りない。同様のことは他のテーマに関しても言えよう。

ここで丸山眞男が日本思想について——実は中国思想をも視野に入れて——述

---

[11] 列挙すれば、存在と知識、自己と他者、言葉、身体、比較。本書では谷 28 が、これらすべてに現象学が関わるということを指摘している。

[12] 西田の時間論をめぐっては、嶺 02 は西田と九鬼の時間論を比較しており、フォンガロ 07 論文も同じく西田の時間論にドゥルーズとの比較から迫っている。嶺 02 は、西田の推論式的一般者について踏み込んだ解釈・説明を与えている点でも興味深い。

[13] さらに言えば、寄稿者の一人である秋富克哉は、その新著『原初から/への思索-西田幾多郎とハイデッガー』（2022 年）で「もの」概念について考察を繰り広げている。

べたことを思い出すことができるだろう。ディアレクティークがなく、タコツボ的であるという性格は、肯定すべきことなのだろうか。問うべきは、タコツボ的であったとしてもなお何において貢献が可能かということだ。

たしかに、中国思想に関するいくつかの論文は、中国思想による哲学への貢献についての強い意識が見られる[14]。倪 15・張 18 が紹介しているイゾ・ケルンにおける現象学的陽明学ないし陽明学的現象学は、そうした内容と受け取ることが出来る――たとえそれが非常に限られた影響関係であるに過ぎないという印象がぬぐえないとしても。

さらに、井川 37 が、中国の思想文化が西洋近代に与えた影響について述べているのは、大きな規模での貢献を扱う。ライプニッツやウォルフに関してはすでにある程度確立されたところの西洋での中国哲学の受容史の内容とも考えられようが、とにかく東アジア思想による貢献を文献的に示そうとするのが、著者の研究の特徴である。示される内容はここ一二百年のことではないとはいえ、哲学的貢献を示すモデルのような仕事である。

井川の指摘は重く響く――「西から東への影響のみならず」その逆に関する「歴史的考察も、必要となるのは当然ではなかろうか。そうでなければ不当・不公平になるであろうから」（本書 685 頁）。「不当・不公平になる」ことへの批判、それはすでに「東アジア哲学」の一つの条件でもある。

４　「東アジア哲学」の成立条件をめぐって

東アジア哲学の一つの大きな手法である比較研究について、倪 15 は、比較研究に記憶に残る成果があまりないと述べている。その理由として挙げられるのは、共通部分を探し出しだすことに満足してしまうことである。そして、もし比較研究的態度が有効なものとなるならば、それは複数の視角を開くことによって、単

[14] もちろん、本書は狭義の哲学の書ではなく、日本哲学以外の領域で、興味深い研究論文が多く見られる。超越性について問う小倉 40 は、思想史的な観点による考察だが東アジアという視野による有益な貢献であるし、同じく本書では少数派であるところの十九世紀以前へと目を向ける呉偉明 38 が中国民間信仰の日本化について述べているのも、非常に興味深い。

一の視点からは解決できない問題を解決するときであろうと述べることで、重要なのが「多角的理解」であることを提起している（本書 164-165 頁）。

「多角的理解」は哲学的思考において常に重要なものであるとも考えられるので、改めて東アジア限定で言うべきものではないのかもしれない。ただし、東アジア哲学の代表的な思想家を挙げれば、彼らに共通なものとして「多角的理解」を挙げることは、やはりできるであろう。なぜなら彼らは、西洋哲学以外の視角をもっていたためである[15]。そうだとすれば、「東アジア哲学」の条件は、

> 西洋哲学だけでなく、日本語圏あるいは中国語圏またはその両方、ないしそれ以上の哲学的伝統をも視野に入れた、多角的理解を推し進めること

と提示することができる。

多角的理解を行うさいに概念的に重要なのは「媒介性」である。なぜなら、間文化的で多角的であることは、媒介的であるということでもあるからだ。丸山が言うディアレクティークの欠如に反して、日本哲学が弁証法に傾くこと、「媒介性」を強調することは、単に時代的制約によるだけではなく、本質的なことなのである。哲学の直接態を古代ギリシアに見るのが神話的な見方であるならば、中国哲学の直接態が中原にあるというのもまた虚構的である——思想は様々な媒介を経ることでしか展開しないのであり、ヘーゲルが中国に哲学がないと述べたのも、媒介性の欠如を指してのことだった。この点で、徹底的に媒介性に注視する田辺哲学は、東アジア哲学の条件に迫るものと言いうる。

本書にもまた、すぐれて文化的媒介性を明らかにする論文が収められている。佐藤 36 は、明治期の東京大学で「中国哲学」という領域が確立していくプロセスを追い、井上円了こそが「哲学というディシプリンを身につけた上で中国哲学/倫理に関する（翻訳でない自らの）著述を実際に出版した東アジアにおける最初の

---

[15] 多角性を可能にするような地理的条件にも東アジアは恵まれている。合田 24 は海洋的な環境から生じる思考へと目を向けている。こうした着想は、小島毅を中心とする科研費「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」（2005-2010）や、稲賀繁美編『海賊史観からみた世界史の再構築』（2017 年）などで展開されている。

知識人」であると述べている（本書 660 頁）。端的に言えば、「中国哲学」は日本で誕生したということになる。

だが多角性・媒介性は、学問的にフェアな空間においてしか活かされない。中国哲学は日本で誕生したというテーゼもまた、自由かつ公正な学術的空間においてしか成立しえない。実際には、中国語圏の哲学研究者のほとんどは近代日本という「媒介」を意識すらしていないし、中国哲学の直接態が中国にあるのは疑えないとされるだろう。中国哲学は日本で成立したというのは、中国に哲学はないと述べたヘーゲルよりも、さらに弁証法的に進んだ理解であるだけになおさらのことである。

媒介性の有無は、洋の東西だけでなく、東アジア内部でもすでに問題となりうる。再び、多角的理解を提唱する倪 15 を見よう。牟宗三が王陽明・熊十力の自覚から道徳性を切り離したという批判のもとに、道徳自意識ないし道徳自証分という自覚に含まれる道徳的判別に着目する筆者にとって、きわめて近い考察を行っていた西田の自覚の哲学は、視野の外におかれている。多角的理解は果たして十分になされているのだろうか。

「東アジア哲学」の発展があるとすれば、学問的蓄積を公平かつ真摯に受け取る姿勢と、それに基づいた多角的理解による媒介性の把握によってだろう。多角的理解と媒介性への着目を条件とする「東アジア哲学」は、対象として固定して見るべきものではなく、むしろ理念として掲げ続けるべきものと、評者には思われる。本書はその確固とした礎になるだろう。

（あさくら　ともみ
東京大学　准教授）